

令和六年度平和祈念滋賀県戦没者追悼式

追悼のことば

本日ここに、ご来賓並びに戦没者ご遺族のご参列のもと、県主催による「令和六年度平和祈念滋賀県戦没者追悼式」が厳粛に執り行われるにあたり、一般財団法人滋賀県遺族会を代表いた

しまして謹んで追悼のことばを申し上げます。

先の大戦が終結して早くも七九年を迎えます。この大戦で全国では二百四十六万人、滋賀県では二万二千五百余柱の御英霊が祖国の安寧と繁栄、人々の幸せと家族の安寧を願いつつ、散華され礎となりました。今日の平

和と繁栄は幾多の御霊の尊い犠牲の上に築き上げられたものであることを私たちは片時も忘れてはなりません。

この悲惨な戦争を二度と繰り返すことなく、平和で豊かな今日において「戦争の悲惨さ」「命の尊さ」「平和の大切さ」を次世代に正しく語り継いで行くことが私達遺族に課せられた責務であると考えております。

戦争を知らない世代が九割を占めるようになっ

た今、戦争の記憶、悲劇が風化の一途にあり、平和で豊かなこの社会を当たり前と思う人がたくさんおられるのではないかと危惧してお

ります。

そういったことも踏まえ、わたしたちは、二度と戦争犠牲者を出さないこと、そして戦争の悲惨さと愚かさを伝えるべく「語り継ぐ遺された傷跡」という合言葉のもと、風化防止部会を立ち上げ、「戦争の傷跡」として一冊の本にまとめ記憶を残せるように、今まてめているところがあります。

さて、私ことですが、私の母、松浦志まは、八日

市で「八紘荘」という陸軍将校（特攻隊員）の宿舎の運営を任されておりました。

ちょうど鹿児島知覧の特攻基地近くで富屋食堂を経営していた鳥浜トメ様と同じく、朝早くか

ら夜遅くまで食事や身の回りの世話をしておりました。

昭和二〇年の春ごろから八日市からも特攻隊が編成され、「八紘荘」の士官にも特攻命令が下りました。

出発の前日、宴を開き、貴重だったビールを振る舞い、別れの歌を謡われたその士官は、出発当日「八紘荘」の上空を低飛行で三回旋回し、その

際、庭へ何かを落とされました。落ちていたのはチ

ヨコレートと、包装、紙の間にはさまれた手紙でした。「色々お世話になりました。」前夜すすり泣いていた士官からでした。

「八日市飛行場」は内地決戦の主戦場となる所、トラック諸島、沖縄、内地での大空襲、昭和二〇

年八月広島、長崎での原爆投下により終戦を迎えました。

松浦志ま（母）は、当時の事をよく言っていたなかで、二二・二三才の立派な士官が紋の入ったサーベルを腰に持ち、皆さん精悍な顔つきで礼儀正しかった。と……

その母も九二歳でなくなりましたが、どんな思いで

士官を送っていたのかと思うと今でも胸が熱くなつてきます。

国を守るために号令下、若者が特攻に駆り立てられていたか、国に尽くすしか考えなかった。今、思うと無謀な作戦だが、進んで受け入れた。そうさせるのが戦争だと。以前訪ねてこられた時、元特攻兵士は私に語られました。

私の父は、昭和一九年六月ビルマで戦死、戦争遺児となり、「八紘荘」を支えてきた母も戦争未亡人となり、言葉として言いきれないくらい悲しく、悔しい思いの中で、私を立派に育ててもらい、今日の私があります。

母が体験したこと、その時の気持ち「大東亜戦

争と八日市飛行場」飛び立つ兵士の思いを、

その

後、我々の生きてきた人生を語り継ぐ事が如何に必要なのではないかと、つくづく感じております。

また、今回の追悼式では、三月に次世代戦跡訪問研修に参加いただいた生徒さんにご父兄の方にもご出席いただきました。少しでも次の世代の方達にこの思いを繋ぎたいという思いからでもあり、ご出席をいただきありがとうございます。

悲しみの歴史を二度と再び繰り返さない、又、繰り返させない思いを新たにし、戦争の愚かさ、そ

して平和の尊さを噛みしめて次の世代にしっ

かりと

語り継ぐ責務が今に生きる私たちの使命であることを改めて戦没者の御霊の御前に固くお誓い申し上げます。

厳粛に追悼式を挙行していただきました滋賀県知事 三日月大造様をはじめ、ご来賓各位に深く感謝を申し上げますと共に、ご参会賜りましたご遺族様のご健勝とご多幸を心からご祈念申し上げます。

戦没者の御霊が安らかにお眠り下さるよう切にお祈りし、追悼の言葉といたします。

令和六年十二月一日

一般財団法人 滋賀県遺族会

会 長 松 浦 友 一